

## あかりの家自閉症療育のキーワード集 抄（8）

（「第17回 あかりの家事例研究会」（11年2月）研究誌より抜粋）  
（「あかりだより No.21」（11.8）より転載）

### 39 明快・先取り・方向の示唆

Hさんにとっての食堂は、Aさんの声とかBさんの視線など苦手な刺激が多い。Hさんはその食事場面で、声掛けに動けなかったり、時にはコップや靴を投げたりする。

そこで、「賢い人は○(マル)、賢くない人は×(バツ)です。×の人に対してはUさん(支援員の私)は怒ります。」という明快な約束を考えた。同時に、他の場面でも、良い事は「○だね。お姉さんだね。」と褒め、悪いことに対しては、「それは×だね。それは許しません。」と強く注意した。そして、何かをする前に「○でやってね。」と事前の声かけも始めた。

そのうち、「○できる！」という返答や、「○できた！」と報告が返ってくるようになった。今では「○で終わってね。」と言っておくことで、食堂でのトラブルは激減した。

### 145 メガネがこわい！ —ゆっくり、ゆったり、受け止めて—

「メガネを壊されないように！」4月当初、先輩職員からFさんについてそんな忠告を受けた。聞けば、毎年、新任職員の何人かはメガネを壊されていた。

ある時、それを忘れてFさんの側に近寄った。すると、忠告どおりFさんの手が僕のメガネをめがけて飛んできた。間一髪であった。

次の機会、Fさんの隣に座る前に、「Fさん、メガネをとらないでね。このメガネはとても高いのだから。とるときには、『とります、壊します』って教えてよね」と。そして、時々「メガネをとらないでね」と言いながら、30分近くを過ごした。

数日後、またFさんと一緒になった。僕は、前回と同様に、「メガネをとらないでね」と言おうとした。そのとき、Fさんが突然「メガネこわいです！」と言い、上目遣いで僕を見ていた。「そうか、メガネが怖かったんだね、だから、メガネをねらってたんだね。ごめん、ごめん、メガネを外すからね」僕は、直ぐにメガネをポケットに片付けてFさんの側に座った。「これで、いいかな？」、メガネを外して僕はFさんにそう聞いてみた。彼女は、静かに頷いた。

それから僕はこう言うことにしていた。「Fさん、メガネをしているけれどいいですか。メガネを外すとFさんのきれいな顔が見えないからね」と。あれから一年近く何事もなく過ごし、メガネを意識することも少なくなっている。こうして、Fさんとの距離が、「メガネ」の話題をとおして近くなったように思う。

※「メガネがこわい」ということについても、少し考察を加えて、別でキーワード化した。

### 188 新人の、私の緊張から・・・

Jさんがやたらと私の事を気にし出したのは8月。9月と11月にメガネを2回壊させてしまった。11月には風呂場でお湯をかけられた。私に対応すると「ヒー」という声を出し始めた。私が悪い影響を及ぼしている事に、情けなく悔しかった。

見るに見かねたH主任が、12月に応援してくれた。Jさんは主任を前にすると、私とは全く違って、視線を合わせて神妙な面もちで話を聞いていた。主任が「Yさん(私)の話を聞くように」といって、Jさんを私に向けてくれた。そうすると、不思議なくらい視線が合い、「話を聞いて欲しいこと」「メガネを壊したり水をかけたりしない、まともなおつき合いがしたいこと」「失敗させないように応援していること」を話し、Jさんは聞いてくれた。

これを機会に目線が合うようになった。いくらかでも話を聞いてもらえるようになった。驚くほどのいきなりの変化であった。今も続いている。

振り返れば、失敗を繰り返す中で私はかなりの緊張状態であった。私の顔を見ただけで手が上がってきたり、ニヤけたり、ヒーという声が出てしまう。それを何とかしなければと焦っていた。肩に力が入り、表情も近寄りたいたいものがあつたに違いない。

Jさんしてみれば、必死で鉄砲を撃ってくる私は、何をしてくるかわからない脅威であつたのだろう。メガネ壊しや水かけは、脅威に対する防衛か反発であつたのかも知れない。いずれにしても、私が関われば関わるほど、Jさんをどんどんおかしくさせていたのは間違いない。

それを、Jさんも私も、先輩が作ってくれた土俵に入って、お互いに力が抜けて向き合うことができたのだろう。

大きな一歩であつた。やっとなのであるが、スタートラインに立てた喜びがある。

## 191 つきあいのはじまり

Lさんはよく奇声が出る。嫌いな場面で特に出やすい。奇声が出ると「大きい声出さないで！」と注意するが、更に大きな声を出させてしまう。ある日、作業中に大きな声が出た。その時、「この糸・・・」というのが聞き取れた。「この糸が何て？」と聞くと、「この糸スキ、この糸キライ」とのことだった。

大きな声は嫌になった時の叫びだと思っていたが、全てがそうではないらしい。それを知ってから、大きな声が出ると「何て言ったん？」と聞くようにした。

最初は逃げられていた。それでもくっついていき、3回、4回と聞くと、「〇〇って言うた」と答えてくれた。それを毎回続け、一週間ほど経つと一回で答えてくれるようになった。

先日は、「キヤキヤキヤって言った」と答えた。「何で？」と聞くと「作業イヤ」と答える。嫌になって意味のない言葉を叫ぶことも分かった。答えてくれると、「ゆっくり言って」など伝え方を教えることができる。丁寧に説明すると、本人も「うん」と素直に聞いてくれることが多い。奇声の後に会話ができるようになった。

## 212 前回大失敗、次は絶対失敗できない！

Gさんの前回の入院は大変であつた。前々回の入院は大きな問題は無かつたのだが。

しかし、今回は、緊急で突然に手術・入院となつたことで、納得できなかったのか、手術室でも術後のベッドでも大暴れであつた。

とは言え、退院時、半年後には再手術が決まっていた。

それをどう迎えるか。いつ、誰が、どういった形で伝えるか、絶対に失敗は繰り返せないゾ！と、号令がかかつた。

早く伝えると、施設から無断外出したり、通院途中で車から飛び出すかもしれない。そういった心配が家族にあつた。だから、病院に行ってから伝えよう、という考え方になる。

しかし、我々には納得して病院に連れて行きたいという思いが強かつた。病院に向かう前にしっかり伝えようということである。もしトラブルがあつても引き受ける覚悟でいた。

結果、〈あかりの家〉で、〈手術当日〉の、朝引継ぎ後の〈トラブルがあつても対応できる時間帯〉に、通院に付き添うことになっている〈選ばれた職員〉が、伝えることを選んだ。

そして手術当日、居室に呼んで、「今日、手術をしてもらうからね」「(Gさんにとって)大事なことから、落ち着いて診てもらおうな」。そして、入院に持参するパジャマ、ひげそり、スリッパを見せながら、「手術が終わったら、入院するからね。あかりには帰ってこないよ。」としっかり伝える。取り乱した様子もなく「ハイ、ハイ」とうなづく。

その後、出発前にパジャマを支援員室から取り出すと、それを見てさっと立ち上がる。そして、病院までの車での移動、診察、手術そして3週間余の入院も、大きなトラブルなく無事退院した。

表出言語はほとんど無いGさんであるが、基本的なことは十分伝わつたと考えた。